

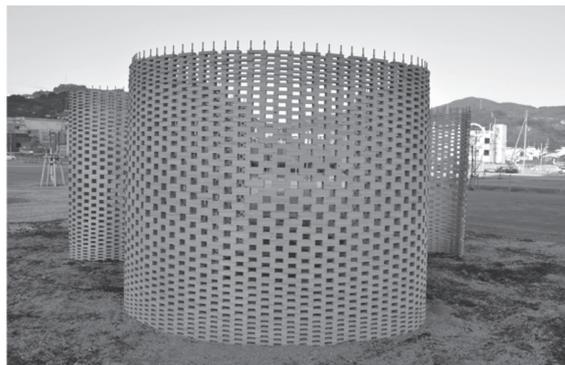
同じところに行くよりは見ていないところがまだまだ沢山あるので、違うところに行きたいわけです。違うもの、違う種類の遺産も見て、考えたりする方が、刺激が多いからです。「もの」というのは一度見てしまうと、なかなか二度足を運んでくれる人は少ないと思います。

二度、三度来てもらうには、工夫や仕掛けが必要です。食べ物がおいしいとか、この遺産はこの場所で、この時みるのがよいとか、の仕掛けや工夫が必要です。例えば、ここの遺産は、満月の光がここに射したときが美しい、雪が降ったときのここから眺める景色がすばらしいとか、季節や天気、時間とかに応じて見どころや視点場を整理した場所のストーリーやシナリオがあると、今回はタイミングが悪かったから、また来なきゃいけないのかなと思うわけです。中でも、リピーターや集客を確保できるのは、おいしい食べ物、名物があると効果は倍増します。「花より団子」という人もいます。来てみたら、景色や遺産もよさげだったので、今度はじっくり遺産を見に来ようとなるわけです。名物が生まれることで、経済的にも活性化します。まちづくりや地域の活性化には、「もの」だけでなく、ソフトの工夫や仕掛けを入れていくことが大切です。また「もの」と人とを関連付けて、人材育成することも必要です。それらをボランティア的に人の善意に頼るのではなく、組織として定着させることが大切です。えひめ地域政策研究センターも、行政と企業が一緒になってやっていますし、今回は愛媛大学が関わっています。こういったことはおそらく制度化は難しいかもしれませんが、定常化することが大切で、継続することが大切なのだと思います。

これは、ものを保存するのは、気が付いたときにやらなければならないことに通じます。私も東京のほうで東京の橋とか土木遺産を調べているときに、地元の人から「なぜ去年来なかったの」とか「今ごろ来ても遅いよ。なくなってしまった」「書類は一週間前に捨てちゃった」とかいわれたものですが、今考えると、遅いといわれてもそのとき行ったことが役立っています。今から30年くらい前の話ですから、30年たつとなくなったものもいっぱいあります。ですから思い付いたときが一番チャンスなので、そのときにやらないと遺産などはなかなか残らないし、残せません。資料や情報収集を含め、やることはいっぱいあります。

こういう一般論的な話は、みなさんもう聞き飽きているかも知れません。もう少し具体的な事例を入

れましょう。愛媛でどんなことをやっているか、調査をしているときにお聞きしたのですが、YGPというグループがありました。このスライドは「八幡浜元気プロジェクト」というもので、会員のひと八幡浜市の若手職員の人たちでつくった、オブジェを兼ねた休み場だそうです。この穴のあいたシリンダー状の構造物は八幡浜名物のかまぼこの板を使って、環境オブジェを兼ねた施設造りをしていました。



「かまぼこ板を活用したオブジェ」八幡浜YGPの活動



岩井の石灰窯（西予市）

愛媛の危機遺産について紹介します。先ほど紹介した少彦神社参籠殿や松山女学校正門などもそうですが、実は昨日、明浜町の岩井の石灰窯に行きました。これは、『愛媛温故紀行』でも触れたのですが、地元の宇都宮長三郎さんにお聞きしたら、これは木炭で焼く石灰窯（木炭窯）の恐らく日本で唯一のものではないか、といわれました。この後、石炭焼きの大型の石灰窯（石炭窯）に移っていくというんですね。明浜には、17、18基の石灰窯があったのですが、壊されたものもありました。現在残っているのは、唯一の木炭窯をのぞくと、いずれも石炭窯なのです。では木炭窯だけを残せばいいのかというと、そうではありません。石灰窯が群として残っているので、全体を残すことで、石灰焼の技術の変遷がわかりますし、全体の施設の配置関係もわかります。